用などがある。

今後、さらに植物ホルモンの研究が進むにつれて、一層利用方面も広くなることであろう。〔蕗蟬義一記〕

地衣類について

山形大学　佐藤正己

地衣類は菌類と藻類の共生体であるが、此は植物の進化過程の或る時期に於て共生を始めたもので、現在では殆ど地衣類として独立せる植物の状態にある。単なる共生でない証拠に、菌類のものでもなく藻類のものでもない共生体独特の成分を作り出す。この成分の為に地衣類を噛んでみると苦かつたり、苦くなかつたりする。それで昔の検索表を見ると地衣類の記載には必ず「味苦し」等と書いてあつた。現在では朝比奈氏によつてP.D.法が発見されて以来、検索にはこのP.D.法を用いる様になり科学的正確さが期せられる様になつた。

地衣類の分布は吾が国では低い所は海岸から高くは高山の頂上迄生育している。地衣類の生育する場所はその空気が清浄であつてかなりの湿度をもつている。工場等の亜硫酸ガス等が空気中に含まれる所では生育しないから、この意味で一種の指示植物であると云える。

地衣類と人生との関係

地衣類には人生に有害なものはない。強いて探せば常緑樹のタブやシヒ等の葉につくアオバゴケがあるが、しかし此とてもその為に樹木が枯れると云う様な事はない。

食用に供されるものとして、古くは旧約聖書によると、モーゼがイスラエルの民を率いて荒野にさまよい飢餓に頻した時に、天上よりマナ(Mana)が降り、此を食べてしのいだとあるが、此のマナ(Mana)と云うのは地衣の一種で、風に飛ばされて来て、時によると20糎もの厚さに堆積する事があると云う。本邦でも徳川時代に著された北越雪譜と云う本に苔を食べる事が記載されいるが、この苔は地衣類の事である。食用に供せられる地衣として代表的なものにエイランタイと云う高山性の地衣がある。エイランタイとは妙な名前であるが之の語源は英語のアイスランド・モス Iceland moth であつて、これに依蘭土苔なる文字をあてゝいたので、次第に音読みして エイランタイとなつてしまつた。バンダイキノリと云うブナの木につく地衣も食用となり、之は支那雲南省、九州、四国、本州にある。精進料理等や高級の料理に珍重されるものにイワタケがある。扁平暗色で裏面に仮根がなく臍状の隆起があつて、

垂直に近い岩壁に附着して居り、採集するには身体を綱で吊り下げて非常な危険を冒して取る。どんな地衣の本にでも食用になる地衣の例としては必ず日本のイワタケが出ている程有名なものである。

尚人間の食用ではないが北方諸国では、トナカイを飼育する飼料として重要なものもある。

薬用となるものに次の様なものがある。エイランタイは苦味があり、之から取つたエキスをエイランタイエキスと稱し、苦味性健胃剤とする。サルオガセは松蘿と稱して漢方薬に用いられる。尚サルオガセの一種 Usnea から採れるウスニン酸と云う地衣独得の有機酸が、抗生物質として非常に有効である事が判つたが、現在の所では人体に副作用が強過ぎるので残念ながら実用化される段階に至つてをらない。同様にハイマツゴケも癌に効く可能性があるが、之もまだ実用化されていない。

染料としてリトマス試験紙を作るリトマスゴケが有名だが、之はギリシヤ時代に羊毛を染める為の染料であつた。リトマスゴケは海南島にまで分布しているが本邦にはない。本邦のものでは海岸に生えるハマカラタチゴケが、リトマスゴケに似ている。第二次大戦中スペインからの輸入が絶えてしまったので軍の生産命令で研究した結果、日本独自の方法でヨコワサルオガセからリトマスを採る事に成功した。

最後に装飾用としてゞあるが、我国でも各地の土産物に白樺の樹皮等で壁掛け等を作つて賣つているものに利用される事があるが、比に用いられるのは主としてハナゴケ、カラクサゴケの類である。スウェデナビア諸国では、二重壁の中に詰めて装飾と防寒とを兼ね、又花環を作るにも大いに利用されている。

〔清水喜久雄記〕

會員募集

新年度を迎えて会員を募集致します。本会は発足以来日が浅く、未だ趣旨が徹底していない様でありますから、同志諸君の勧誘をさそつて下さい。入会希望者は本号の会則を御覧の上、会費100円を博物館へお送り下さい。